

21年産を振り返る

その2

作況指数
平年並み

個々の生産者で作柄に大きな差

気象変動に負けない柔軟な農業をしよう

生産者通信

NPO法人
米ニケーションセンター
定価 100円(送料込)

10月31日の新潟日報に今年度産のコメ作況指数が発表されました。本県は「平年並み」の99でした。低温で作況が89だった北海道に比べれば、まああの作況と言えるでしょう。地域別の作況指数も掲載されていましたが、県内には大きな作況の格差はなかったようです。

しかし、それはあくまで地域ごとの平均の作況であって、同一地区でも個々の生産者、更には個々の水田ごとに見れば大きな差があったと思われまふ。先月号で報告させていただいたように、我が家は近年にない不作だった訳ですが、その良い(作況は悪い)例です。すでに我が家の不作だった原因について一定の見解(言い訳)を述べさせていただきましたが、全体的な作況から見ると残念ながら特殊な、例外的な作柄の分析であり一般論としては何の役にもならなかつたと反省しています。

特に当柏崎・刈羽地区では3年続きで品質が良く、コシヒカリの1等比率が今年度は93.5%でした。これは地域的に見れば申し分のない作柄だったと言えるでしょう。問題はそれ以前の柏崎・刈羽地区の品質はお世辞にも良かったとは言えず、例外年を別にすれば常に県内の最低レベルを争っていましたから、3年続きの高品質は一体どうなつてしまったのかと言う疑問がわきます。「田植え時期が遅らせる(コシヒカリは5月10日前後)。元肥を減らす」という指導を徹底した成果が現れたという解説もありますが、県内ではほぼ同様の傾向になつていまして説得力に欠けています。「丁度良いときに雨が降つてくれたお蔭だ」と言う論を唱える人もいますが、むしろこちらの方が私には説得力があると思われまふ。

土地利用型農業の代表である稲作は収量、品質共にその年の天候に規定されてしまうのは止むをえないのでしょう。しかしそれだけでは私たち生産者の努力や技術の向上は不要で、意味がなくなつてしまいません。天候による被害を完全に防ぎ無くすることこそが、求められている技術だと思われまふ。

検査格下げの要因は主として、県内には基部未熟・背白・乳心白、あるいは偏平粒・奇形粒等、登熟障害による未熟粒の混入が規定をオーバーしてしまうためです。そしてそれらの発生要因は登熟期の異常高温だというのが定説になつているのはご承知のとおりです。

高温下での出穂、登熟を避けて出穂期を迎えるようにすれば、高温障害を回避できることから田植え時期が遅らせる技術指導がなされている訳です。最近の気象変動を考えると5月10日で良いのかどうか、むしろ播種時期そのものを遅らせることが出穂期を遅らせることに直接連動するのではないかの検討を要するのではないのでしょうか。

さて、これらは総て無意識にコシヒカリの栽培を前提にしてしまつていますから、元々登熟期の早いこしいぶき等の品種には当てはまらないことになりまふ。現状では新潟産コシヒカリが供給過剰で他の品種への誘導が課題になつていまして、コシヒカリに固執するのは時代遅れのご批判をいただくかも知れません。



しかし、どんな時代がこようとも新潟産コシヒカリのブランドだけは守り抜かなければならないと思いまふ。気象変動に対応して新しい品種が次々に誕生するでしょうが、そうしたのもや他県産のコシヒカリでは真似のできない、高品質と良食味の新潟産コシヒカリを抜きにして新潟の米作りはないと思いまふ。コシヒカリの作付け比率を減らすことは反対ではありませんが、今年産のこしいぶきの仮渡し単価があまりにも引き上げられ、コシヒカリとの格差が小さくなつたことにはいささかの疑問がないわけではありまふ。

生産者の皆さんはこれから冬場に向かって、来年度の作付け計画を検討されるのでしようが、新政権の所得保証制度の詳細が見えてこないのが何より気がかりです。

(内山常蔵記)

農機具の手入れは完璧ですか？ 機械の清掃は米の品質管理に繋がります

上越市にお住まいの竹原勝浩さんは、シーズン終了後、すべての農機具を分解し、清掃しながら破損箇所のチェックを行っています。分解して機械の隅々まで清掃することで機械の構造を知ることにつながり一石二鳥。皆さんも竹原さんをお手本にしましょう！



Agri-s の



農機メンテの部屋

Vol.1

収穫調製作業も終わり、出荷作業・栽培履歴の記入等まだまだ忙しい時期の突如の初雪で、びっくりの11月の始まりでした。

この度、コーナーを(不定期ですが)担当することになりましたAgri-sです。皆様はプロ農家の方ばかりですから今更と思われることが多々出るとは思いますがお許しを。

さて、農家は農作業という仕事の中で様々な機械・道具を使いますが、最近のコンバイン等はコンピュータフル装備でちよつとしたトラブルでも現象が再現せずサービスマンのPCで確認したらセンサー不良で交換など、一般農家はおろか

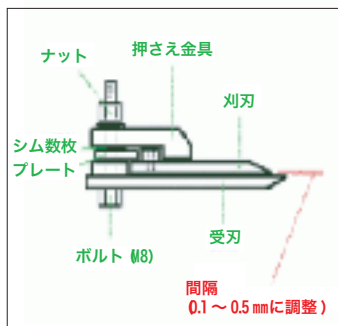
今迄簡単な故障位は自分で修理されていた方もちよつと手をだせなくなりつつあります。ただ、言えるのは高性能な最新の機械といえ普段からの点検はもちろん取扱説明書を熟読して正しい使い方が大事かと思ひます。

また、逆に耐用年数を超える頃になると修理費がかさむようになる機械でも何年も付き合っていると愛着がわいてくると思ひます。そんな機械のちよつとしたポイントを書こうと思ひます。

第一回は、この秋の主役の一つであったコンバインの格納前についてです。

もうすでに、清掃等を済まして格納又は修理に出した方も居られると思ひますが、一応おさらいを。まず、足回りの泥を落とし、脱穀部、刈り取り部のカバー類を外して、たまたまっている藁くず、巻きついた草などを丁寧に取り除き各部のエアーブローを行った後、車体をジャッキアップし、刈り取り部(刈刃、摩擦、搬送チェーンの伸びなど)の点検。

その後、クローラを浮かして各車輪のガタ等をチェック、グリスアップをたつ



後は、走行系、作業機系のベルト類のチェック、ベ

ぷりと(機種によってはグリスアップができない物もあります)。また、クローラの内側の亀裂がないかチェックして、大きな亀裂があったらクローラの交換及び駆動スプロケットギア及び駆動スプロケットギア摩耗チェック、交換を考えたいほうがよいかと思ひます(我が家の更新時期が近いコンバインは、シーズン前のチェックでクローラの内側にひび割れが発生していたものを見逃した為、シーズン途中でクローラが切れ、3日ほど作業中断とえらい目にあいました)。

ルトを外して裏側に亀裂があれば交換、さらに各プリークのベアリングのガタがあれば交換が必要。(但し、次のようにプリークから取り外し可能なベアリングであればシールドを外してグリスを再充填すれば再使用可能であるが費用対効果から見れば部品交換の方が安いかも。)



次はエンジンオイル等の交換をするついでにオイルフィルター(特にターボ付エンジンのオイル劣化は意外と速いです)。

後は、以外と見落としやすいところが、エンジン冷却水のLLCの劣化。新車時から2〜4年で交換を推奨しているメーカーがほとんどです。これはLLCの色が薄くなっている等、劣化してくるとエンジン内の冷却水路内の水さび発生が高くなり、エンジン内の5〜8mm程度の極細な水路に固着しやすく、極端な場合はエンジンオーバーヒート、オイル吐き等のトラブル発

生の原因の一つでもあります。

最後は、バッテリーの液の補充と充電を行っておけば次シーズンは安心して稼働できると思ひます。

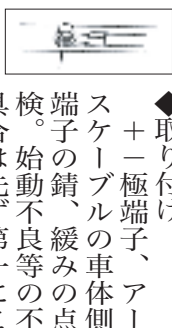
バッテリーについて



◆取り外し

慣れている方はご存じでしょうが、外す時は一極、取り付け時は十極からです。

★シールドによる火傷をしない為にも励行してください。



液の量を確認します。不足の場合バッテリー液の補充。(中に埃を入れないよう注意)

・充電後の液比例を測定し各セルが同じでない場合はバッテリーの不良なので交換が必要。

電極の錆等も落とす、ターミナルにグリースの塗布。

★液こぼれはお湯で洗い流しを。

以上簡単ですが皆様の参考になれば幸いです。



加工米 醸造用加工米)

22年産

ゆきの精の作付希望者を募集します

希望する方はエコ・ライス新潟まで連絡をお願いいたします。

0258-66-0070